

第一章

教育

—そのタテ前と本音—

小池 滋



「教育フランケンシュタイン」『パンチ』[1884年カレンダー]
1870年の法律による国民皆教育がどんな弊害をもたらすか
—その結果失職した者はどれほど？

第一節 教育がオブセッションとなる時

多くの人生は六ヶ月前に比べて千倍——そう、百万倍——も豊かになっている。多くはもはや世界に含まれている最善のものに無知ではなくなったのだ。あとほかに残っているのはギリシヤに行くことだけだ。そうすれば教育の基本の仕事はすべて完了だろう。教育それ自体こそが、多くの生涯の仕事でなくてはならないのだ。

(Letters 3:31-32)

ギッシングは一八八八年十二月三十一日に、イタリアから妹エレンに宛てた手紙でこう書いている。子供の時から、そしてロンドンでの長い貧乏文士生活時代を通じて憧れていたイタリアの土を初めて踏んだのだから、その感激のあまりの多少大げさな表現は割り引かねばなるまいが、それにしても最後の言葉は大変な——痛々しいとさえ感じられるほどの——決意表明ではないか。確かに秀才と周囲から褒めそやされていた少年時代から、教育こそが彼の理想——いや、オブセッションと言う方が適切であろう。

だが、はたしてこれはギッシングの個人的気質のみから生じた特異現象なのだろうか。ある程度まではそうであるかもしれない。しかし、彼が生きた十九世紀イギリス一般の社会を眺めてみると、彼の同類のような人間がうようよいいたことに気づく。

ギッシングは時代精神のあまりにも典型的な一例証であったことが、彼の生涯と作品から見てとれる。本章では、まず十九世紀イギリスの教育についての考え方を概観し、その具体的なあらわれとしてギッシングの（生涯の出来ごとについてはごく簡単に触れるだけに留めて）作品のいくつかを検討しよう。

いつの時代でも、またどこの国の人でもそうであろうが、教育ほどタテ前と本音の喰い違い、その使い分けの露骨さがひどいものはないように思える。例えば、上の引用の最後でも、わざわざ「教育それ自体」と言っている。教育とはそれ自体を目的とする純粹無償の行為でなければならない、それは世俗的な目的に奉仕するための手段であってはならない——というのが世間一般のタテ前であって、ギッシングもそれに賛同している。

だが、本音をさらけ出せば、多くの人びとは教育を何かの目的を達成するための——例えば、世の中で出世するため、お金や名誉を勝ち得るための有効な手段であると認め、そのように実行している。そして、このような都合のよいタテ前と本音の使い分けに成功している——あるいは使い分けられていることに本人が気づいてさえいない——間は幸せなのだが、本人がその矛盾に気づいてしまうと、自分の払った犠牲の大きさに愕然とする——だけでは済まなくて、とり返しのかかぬ悲劇が生まれることさえある。知ることの不幸である。

これと関連していることだが、教育と言う時に、その対象が誰であるか——これも、理論上ははっきり区別できてよいはず

だし、区別しなければいけないのだが、実際にはあいまいになつてることが多い。自分の精神を豊かにすることだけを考えればよいのか。それとも、他者、すなわち単数が複数の他の人間の才能を引き出し、人格を養つてやらねばならぬ仕事なのか。もつと広く考えれば、社会全体の向上までをその使命の中に含まなくてははいけないのか。この二つをはっきり割り切つて區別できるのか。

さきのギツシングの手紙を読む時、わたしたちが自然に考えるのは、もちろん、教育と言う時に彼が意味したものは、自分の精神を豊かにすることであつたらう。ギリシヤやラテンの文化に触れることで、いわゆるリベラル・エデュケーションを完成させることであらう。その決意表明があの手紙の趣旨であつたらう。

だが、ギツシングの伝記を少しでも読んだ人なら、そう簡単に納得するわけにはいきまい。父親に早く死なれた長男ジョージ・ギツシングは、若いうちから弟や妹たちの教育に必死になつて尽力した。彼の弟や妹に宛てた他の手紙を読むと、その——確かに善意から出たものであることはよくわかるが——あまりにも露骨なお説教臭さに、うんざりすることがある。

そして、うんざりしているだけならよいのだが、その教育の効果がどうであつたかを知つてしまうと、何とも空しい気持ちになる。弟や妹たちは、兄の望んだようになりべラ的な精神の持ち主に成長してはくれなかつたようである。さきに引用した手

紙の相手であるエレンは、後に兄が書いた『因襲にとらわれぬ人々』(一八九〇年)の主人公の一人ミリアム・バスクが、自分をモデルにしたのではないかと不満を洩らした(Koppe, 1948) そうだが、もちろんこれは誤解である。エレンはミリアムのように偏狭な宗教的道徳から解放されることがなかつたという。そんな彼女が自分とミリアムを重ね合わせることで自体、滑稽な、あるいは憐れむべき無知と言わねばならない。さきの手紙の間を読むと、兄が妹を教育しようとした意図が見えてしまつが、残念ながら効果はなかつたようである。

もうひとつ、ギツシングが二人の妻に対して抱いた感情の中に、教育したいという善意を読みとることは容易であらう。だが、ギツシングにとつても、それぞれの妻にとつても気の毒なことに、ここでも教育がよい成果を生むことができず、悲惨な結果に終わったことは、伝記を読めば明らか通りであつた。

ギツシングの個人的事情については、これ以上詳しく述べる必要あるまい¹⁾。教育という仕事がいかに難しく、いや危険なものであるか、そして教育がオブセッションになると、いかにその危険が大きくなるかは、以下の記述によつて充分証明できるだろう。

第二節 教育をめぐる諸問題

ここでは十九世紀イギリスで、教育の問題が一般国民によつ



図①「横暴だ、初等教育法実施？」『パンチ』（1870年4月2日号）

ならず者A「おいらたち、むりやり教育されちまうんだとさ。いやだと言うとぶち込まれるんだってさ」
同B「それであんなに大勢移民するんだな」

てどのように受け取られていたかを、簡単に述べることにしよう。詳しく知りたい人のために、まず現在わが国で簡単に読むことのできる本を紹介しておこう。

ブライアン・サイモン著、成田克矢訳『イギリス教育史』
とくに、その第一巻『二つの国民と教育の構成（二七八〇〜一八七〇年）』（原書は一九六〇年、邦訳は一九七七年、亜紀書房）

表題に示されている一八七〇年という年は、イギリス国会で初めて初等教育法（図①）が可決された年であるから、この巻では国会が公教育にはつきり踏み切るまでの、かなり長い期間を扱っている。また「二つの国民」というのは、一八四五年に発表された、政治家で小説家でもあったベンジャミン・デイズレーリの長篇小説『シビル』、あるいは二つの国民の表題から取ったもの。同じイギリスの国民でありながら、特権階級と一般庶民とは、はつきり二つの別々の対立した国民になってしまっているという警告を発し、この二つの融和統合こそ時代の最大課題だというテーマの「社会小説」を発表したのである。以後「二つの国民」という言葉がよく使われるようになった。

最初の初等教育法が可決されたのは一八七〇年、わが国でいう明治三年であると聞くと、明治五年に「学制」を定めた日本の人は、先進文明国と思っていたイギリスにしては、何と遅れたことかと驚くかもしれない。でも、一八七〇年以前に初等教育が全く制度化されていなかったわけではないことは、上に挙げたサイモンの本を読めばすぐ理解できよう。

ただ、イギリスでは伝統的に教育とはあくまで個人の問題であって、政府や議会が干渉するのを嫌う傾向が強かったこともあって、法令化が確立するまでには、さまざまな過程を踏まねばならなかったのである。確かに「教育とは個人の領分」というのは正しいタテ前であって、他から介入されるのは防がねばなるまい。でも、ここでもタテ前と本音の喰い違いがあつて、

階級間の障壁が確固として存在し、安定していた間はさしたる問題は起こらずに済んだ。

だが、十九世紀に入ると、この階級間の壁にひび割れが生じ、崩れかかって来た。「二つの国民」なんぞという言葉が一般人びとの間で流行したこそが、そうした流動化を証明していることになる。自分の生まれた階級や身分におとなく留まっていることに満足できぬ人に、階級を遮二無二駆け上がって出世するチャンスがやって来たことが、わかりかけて来たからだ。

上の階級に「成り上がる」のに有効な武器の第一は、もちろん金である。社会的身分も、紳士の称号も、国会の議席も、財力によって獲得することが夢ではなくなつた。しかし、金だけでは、それこそ「成り上がり者」と軽蔑されるだけだ。もうひとつ役に立つ武器が「教育」だった。教育がないために自分がいかに差別され、不当な扱いを受けたかを身にしみて知っていた新興階級の親たちは、自分の子孫に「いい教育」を受けさせようと血まなこになつた。

だが、オックスフォードやケンブリッジのような大学、そこへエスカレーター式に進学できる名門パブリック・スクール（もちろん公立ではなく私立）などは、こうした新参者を受けつけてくれない。そこに目をつけてひと儲けしようと、地方のなるべく辺鄙な場所に、新興寄宿制学校が雨後の竹の子のように現れた。

詳しい事情を知りたい人は、デイケンスが一八三八年に発表し始めた小説『ニコラス・ニクルビー』の前の部分を読むのがよからう。デイケンスはさすがに新聞記者上がりだけあって、悪名高いヨークシャー州の学校を自身探訪調査した上で、「ドゥーザボーイズ（少年たちをやつつけろの意）・スクール」とその校長を描いたのであつた。この小説は大ヒットして何度も版を重ねたが、一八四八年の版に彼自身が寄せた序文の中で、次のように書かれている。

私立学校こそ、英国における教育の長い間にわたる恐るべき怠慢……国民の無関心を如実に示す実例である。他の職業に全く不適格であると証明された人間が誰彼かまわず、試験も資格も一切なしで、勝手にどこでも学校を開くことができた。……こうした人種が尊敬すべき礎石となつていたわが社会こそ、不条理と雄大高邁なる自由放任主義の世界に冠たるお手本だ。

教育は個人の問題だから外から干渉すべからずという、イギリス人のタテ前を痛烈に叩きつづいた本音がここにある。もうひとつの文学作品、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』（一八四七年）の中に描かれている寄宿制女学校（かなりの程度まで忠実に作者の実体験に基づく）の状況は、よく知られているから、ここで詳しく引用するまでもあるまい。

さすがに、教育に対する国の介入、規制や財政援助などを求

める一般世論が高まって来た。体制側に反対するラディカルたちの多くが、その先頭に立つて発言した。例えば、「最大多数の最大幸福」の名文句で知られる功利主義哲学者ジェレミー・ベンサムは、多くの教育制度批判や改革提言を盛り込んだ『クレストマシア』という本を一八一六―一七七年に出版した。この表題は「役に立つ学問」という意味のギリシヤ語から出ているが、まさにベンサムの教育に対する姿勢をはつきり示している。彼は発言するだけでなく、それを実践する新しい学校のために、ロンドンの自宅の庭を提供した。これは昼間だけの通学校だが、後に寄宿舎設備も伴う同じ性格のヘイゼルウッド学校が、中部イングランドの大商工業都市バーミンガムに設立された。どちらも、もちろんのことながら、伝統的なオックスブリッジ大学やそこへの人材補給源パブリック・スクールとは全く違った教育方針を打ち出した。宗教は完全に教育から排除され、古典語は科目に入っていないし、それに代わって科学教育が重視された。まさにベンサムの本の表題そのものが実現したのである。ベンサムは後にロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジの母胎ともなるべき学校の設立にも貢献している。

またスコットランド出身のヘンリー・ブルーム（一八三〇年に男爵となる）は、選挙法改革などを強く主張したラディカル論客だが、一八二六年に「有用知識普及協会」を設立したことで知られる。彼は庶民の初等教育を国が行うべしと国会で訴えたが、やはり強力なタテ前論に阻まれて実現を見ず、一八六八

年に死んだ。

しかし、正式の法制化に至る前に、少しずつその土台を築く作業が実現したあたりが、いかにもイギリスらしい。一八三三年には庶民の教育に対する国庫からの最初の助成金二万ポンドが認められた。また一八三九年に、枢密院に公教育問題を検討する委員会が設けられて、その初代事務長にジェイムズ・ケイⅡシャトルワースが任命された。彼はマンチェスター近くで生まれた医師で、もともとはジェイムズ・ケイⅠだったが、名門シャトルワース家の跡とり娘と結婚して、このような複合姓を名乗るようになった（これはよくあること）。

それはともかくとして、ケイⅡシャトルワースはイギリス公教育の祖といわれ、二つの重要な著作、『枢密院委員会一八四六―一八五二年議事録の公教育に対する影響』（一八五三年）、『公教育の四つの時期』（一八六二年）を残しているが、いずれも彼の姿勢をよく示してくれる。

それにしても、なぜ枢密院委員会なのか、なぜ国会の委員会ではないのか、という疑問が出るだろう。そこが、いかにもイギリスらしい、タテ前と本音の巧妙な使い分けの好例と言ってよい。『枢密院』（Privy Council）についての詳しい説明は百科事典などに譲るが、要するに君主、当時で言うヴィクトリア女王の私的最高諮問機関なのである。それこそタテ前からすると、ここで国の公教育について議論するのは、筋違いなのであるが、国会で議論すると例のタテ前からする強い反対が出て難航する

のがわかりきっているので、王室の私的委員会を隠れ蓑に利用して、ともかく実績を築いてしまおうという妥協の産物である。

さて、ケイ・シヤトルワースは自ら一八三九（一八四〇とする文献もある）年に最初の小学校教員養成学校を、ロンドン西南郊外（現在は市内）のバタシーに設立し、後にこれがセント・ジョンズ・カレッジとなった。日本でいうなら、かつての師範学校、いまの学芸大学というところだが、さすが医師の出身だからか、ケイ・シヤトルワースの教育方針は実学重視だった。学校を出て小学校の教師になった時すぐに役立つ知識を授け訓練を施した。教科目ももちろんそれに沿って選び、実際の小学校クラスにおける実習に重きを置いた。まさにプラグマティズム精神の粋である。

さらに、この教員養成学校生徒の中で優秀な者、将来有望な者を助教師に抜擢して、体験を積ませると同時に、何がしかの報酬をも与えることとした。つまり、伝統的な職人の徒弟制度を導入した。確かに、教員養成学校に入って来た若者には、一般の授業料の高い私立学校へ行けない貧しい家庭の出身が多かったから、この制度は大きな励ましとなった。経済的にも助かるし、先生という世間的に立派な称号をも獲得できるのだから。

さて、こうした動きを見て、体制側も黙ってはいられなくなった。パブリック・スクールからオックスブリッジ大学への主

流の源泉にあるのは、もちろんイングランド国教会（しばしばイギリス国教会とか英国教会とか呼ばれることがあるが、誤解を招きやすい。勢力範囲はイングランドに限られているのだから）である。もともと首長が国王であることでもわかるように国政とは完全癒着であるから、庶民の子の初等教育施設を直接経営することは、タテ前上できないはずなのだが、現実には一八一一年に国教会は「国民協会」という団体を設立して、主として貧しい（従って授業料を必要とする私立小学校へ通う余裕のない）庶民の子供のための無料小学校を経営することとした。これが「ナショナル・スクール国民学校」と呼ばれるもので、わが国の太平洋戦争末期にあった「国民学校」を知る人は、てっきり公立小学校と思い込んでしまいかもしれないが、実は宗教法人の財政負担による私立小学校であった（図②）。

国教会側の国民協会は、ケイ・シヤトルワースの教員養成学校を見て、これに張り合うような同じ学校、のちのセント・マークス・カレッジを、同じくロンドン西南西郊外（いまは市内）チェルシーに設立して、その校長に詩人・批評家として有名なサミュエル・テイラー・コールリッジの二男ダーウエント・コールリッジを任命した。さらにベンサムベンサムのユニヴァーシティ・カレッジに対抗したのか、（後にロンドン大学に入ることとなる）キングズ・カレッジを設立した。

セント・ジョンズ・カレッジと同じ地域に誕生し、名前も似ていたが、セント・マークス・カレッジの教育方針は完全に違



図②「学校の格差」『パンチ』（1898年6月4日号）

A「BOARD SCHOOL（公立学校）と BOARDING SCHOOL（私立の食事付全寮制の学校）の差は大きいでしょう？」
B「いいえ。£. S. d.（ポンド、シリング、ペンス、つまり費用）だけよ」

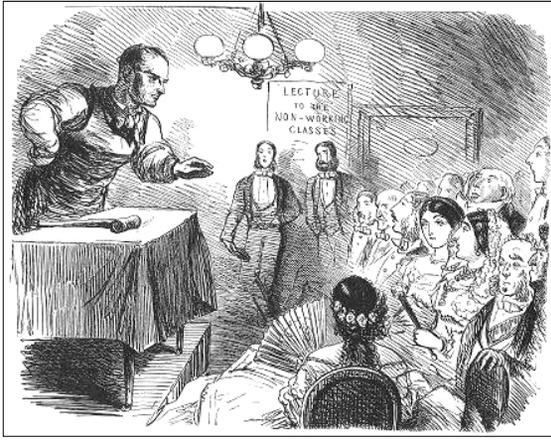
っていた。こちらがオックスブリッジ大学のそれと同じで、古典語を重視するリベラル・エデュケーション、つまりすぐには職業に役立つことのない教育を基本に置いたのは、国教会系であるからには当然であろう。

このように、それぞれの教育理念のぶつかり合いを知らずのまま、公教育への道が次第に固まって行つたわけだが、どちらの側にもタテ前と本音の喰い違いによる弊害もまた次第にあらわになる。役に立つ教育というと聞こえはいいが、実際には、先生あるいはマニユアル本から命じられた通りに知識をがむしやりに詰め込み、一夜漬け勉強で試験に合格して、見事教壇に立つことができた先生が、どんな教育を子供たちに施すことに

なるかを考えると、身の毛がよだつてはいないか。デイケンズが「ハード・タイムズ」（一八五四年）に登場させたマチョーカムチャイルド先生のような人がいてもおかしくない。あれはデイケンズお得意のカリカチュアだと笑って済ますわけにはいかないのである。

正規の学校以外にも、理解ある資本家が、タテ前上は労働者の福利厚生のため、本音では過激な労働運動などに走るのを防ぐために、大都市に「職工会館」というものを設けて、集会室や図書室を提供し、夜間にはそこで授業を行うことが多く見られた。やがてメカニクス・インスティテュートとは「夜学校」の意味で一般に使われるようになったが、当然のことながら、そこで行われた授業は最低限の読み書き算数と、仕事に役立つ知識を主として教えることであつた。

ところが、全国この施設を巡回して、精神訓話を熱心に行う人がいた。サミュエル・スマイルズはスコットランドの一人の息子で、最初は開業医、後にジャーナリスト、鉄道会社重役など、いろいろな仕事をやったが、まさに出世階段を自力で昇つた十九世紀イギリス立志伝の化身のような人物だ。だから、確固たる階級の障壁が崩れて流動化した社会においては、他力や素性などに頼るのではなくて、勤勉に自己の能力を開発する教育の力で出世階段を昇ることこそが人間として価値があること——つまり、「ジェントルマン」の証しであると信じ、またそれを他人に教える義務があるとも確信したので。



図③「非労働者啓蒙クラス」『パンチ』（1858年10月30日号）
普通は労働者でない上流階級の人が労働者のための教育を
施してやるものだが、たまには恩返しをしてもよかろう
（スマイルズ先生もまっさお）！

だが、ただお説教をしても昼間の仕事で疲れている職工たちは退屈するだろうから、具体的実例をたっぷり盛りつけて、聴衆の注意を集中させねばならない。そこで偉人小伝の詰め合わせのような講演を次から次へとやらかした（図③）。これが結構評判がよかったので、それをまとめて二冊の本として、一八五九年に刊行した。題は「自助論」^{（セルフ・ヘルプ）}。これがこれがベストセラーとなつて、刊行後一年以内に二万部売れ

たというのだから、国民の読み書き能力が今とは比べものにならぬ当時としては驚異的人気だ。彼はすっかり気をよくして、『人格論』（一八七一年）、『儉約論』（一八七五年）など、次々に処世訓の本を発表した。『自助論』が英国留学から帰朝したばかりの中村正直によつて『西国立志篇』として邦訳され、明治四（一八七二）年出版と同時に爆発的人気を呼んだことは、歴史が教えてくれる。

いまとなつて見ると、スマイルズの本や教えを古臭いお説教節と茶化すことはやさしい。だが、そんなつまらぬ本が、どうしてあんなに人気を呼んだかを考えてみる必要がある。既に述べたようにイギリス十九世紀という流動化した時代の、とくに若い世代、自分のアイデンティティや才能に不安を覚えていた人たちに、ある拠りどころを与えてくれたことは、容易に理解できる。教育のもつタテ前と本音の矛盾に困惑していた青年たちに、応援歌となつて響いてくれたのだ。それは、過去の具体的な実例の羅列という、あまりにも即物的、だが実質のある盛りつけ方のお陰と言つてよかろう。伝統的に経験論を重んじる国民性は、説教者のスマイルズにも、その説教を聴いたり読んだりしていた一般大衆にも、共通していたのだから。

こうした実証主義に基づく近代科学が急速に広まったのが、十九世紀のイギリスだった。過去・現在の事実を多量に、しかも精密に調べて、ある体系を作り上げれば、それが未来の発明・発見につながる——つまり、人間と社会に無限の進歩と実

利をもたらすという楽天的信仰が、スマイルズの教育方針の根本にあり、受け取る側もそれを素直に受け容れてくれた。教育もまた科学と同じ方法論を中心としなくては効果はないという確信が根づいたのであった。

スマイルズの『自助論』が刊行された一八五九年には、これよりもっと有名になり、後世にもっと強い影響を及ぼした本、チャールズ・ダーウインの『種の起源』が出版された。もちろん、これは単なる偶然で、両者の刊行の間には関連はないが、生まれた背景に共通した精神風土、科学的思考への強い信頼があつたことは間違いないだろう。⁴⁾

第三節 精神成長をテーマとする小説

教育という魅惑と危険の双方をはらんだ美声に人びとが呪縛されていた十九世紀イギリスに生まれたギッシングであるから、教育が大きなオブセクションとなつたのも無理からぬことだつた。そこで、彼の主として前半の作品の中に、教育のテーマがどう扱われているかの検討に移ろう。ただ、あらかじめお断りしておかなくてはいけないが、紙数に限りがあるので、彼の作品の梗概は省略することになる。それについては、松岡光治(編)『ギッシングの世界』(英宝社、二〇〇三年)を参照していただきたい。

小説における教育のテーマといえば、当然すぐに思いつづくの

は、主人公の自己教育による精神の成長の軌跡を辿る種類の小説、一般にビルドゥングスロマン (*Bildungsroman*)⁵⁾ と呼ばれているものである。ギッシングは活字になった最初の長篇小説『暁の労働者たち』(一八八〇年)以来、まさにこの名がぴったりに当てはまる作品を多く世に問うことになった。この小説は確かに社会改革を扱っているが、読者にもっとも強い印象を残すのは、ヒーローであるアーサー・ゴルドディングと、ヒロインであるヘレン・ノーマンの精神形成のプロセスである。

最底辺の生活環境で生まれたアーサーは、画家としての才能を認められ、芸術家になろうと志すが、純粹無償の行為として美を探求し創造する仕事に徹すべきか、それとも現実の矛盾の解決、貧困と無知のどん底にいる人びとを教育し救済するという社会改革の仕事に己れの才能を活かすべきかというディレンマに苦しむ。もっと個人的には、貧しさゆえに堕ちた女キヤリーへの愛が社会正義感と合体して、彼女を教育し救済しようと結婚する。

彼がお手本にしたかったのは、十八世紀の画家ウィリアム・ホガースであったが、彼がホガースほどの才能を持っていなかったからか、あるいは十九世紀イギリス社会の現実がホガース時代のそれ以上に厳しかったからか、彼の理想は無残にも挫折してしまい、最後にアメリカで自殺することとなる。

芸術家としての使命を貫き通すべきか、それとも一市民として社会正義のための義務を忠実に果たすべきか、この二つの目

的の分裂・矛盾というのは、十九世紀から二十世紀にかけての多くの小説に見られるテーマであるが、ギッシングの多くの小説もこの苦悩のテーマを扱わざるを得なかった。

ヘレンは牧師の娘で、真面目な勉強家だったため、新しい学問に関心を抱き、多くの本を読んだ結果、例えば聖書の記述に実証科学による検討を加えたドイツの学者フリードリッヒ・シユトラウスの著書『イエス伝』（一八三五〜三六年）に強い感化を受け、伝統的キリスト教信仰に疑いを持つようになる。彼女がシユトラウスゆかりのテュービンゲンに留学した時の日記によって構成されている第一巻第十四章のタイトルは、そのものずばり「精神の成長」(Mind-growth)となっている。

だが、ヨーロッパ大陸の学問の洗礼を受けてイギリスに戻った後、「人類教」の信奉者として社会改良の実践活動に献身するが、期待していたほどの効果が認められないこと、彼女の活動が救済の対象である貧民によってすら正しく受け取って貰えないことを思い知らされて絶望する。アーサーに抱いた愛も実らぬことを悟り、転地療養先のフランスで病死する。

「暁の」という表題は、一見希望を暗示しているかのように思えるが、実は最後になつても明るい陽光、精神教育の充実した成就は見えて来ない。この作品は芸術的には未熟（例えば、作者の個人体験があまりにも生のまま盛り込まれている点）であるが、ギッシングのビルドゥングスロマンの特質を既にはつきり示している点で興味深い。

そして、彼のビルドゥングスロマンのひとつの完成ともなっている『流謫の地に生まれて』（一八九二年）で、その特質もつとも顕著に露呈されている。しがたない身分に生まれた主人公ゴドウィン・ピークは、猛勉強で奨学金を得て、やつとパブリック・スクールに入学するが、もちろんひどいコンプレックスに襲われる。その時唯一の支えとなっていたのは、弟が（おそらく冗談かおべんちゃんからか）贈ってくれた「精神の貴族」という称号だった。

庶民一般の少年が必死に掴もうとしていたのは、ベンサムのいうところの「役に立つ学問」であつたが、ゴドウィンの自負心はそんなケチなもので満足することを許さなかつたから、「役に立たない」リベラル・エデュケーションを求めて無理してパブリック・スクールに入ったのである。だが、結局のところ——これは頭がなまじよかつたための不幸であるが——自覚せざるを得なかつたのは、自分の知的努力も純粋無償の行為ではなくて、目的のための手段、スマイルズ流の立身出世の報酬目当ての頑張りと同じものに過ぎないということだった。「精神の貴族」から「事実上の貴族」になりたいという上昇志向、そのためには自分より上の階級のレディと結婚しなくてはというのが、彼の本音だった。

幸か不幸か、そのようなレディと親しくなり愛することになつてしまった。父親からウィリアム・ゴドウィンの名をつけられたくらいだから、彼は筋金入りのラディカル、宗教に懐疑の

メスを入れる実証科学の擁護者だが、彼女の関心をかうために、伝統的キリスト教の牧師となる決意をせねばならなくなった。ここでも、タテ前と本音の使い分けをせざるを得なくなる。そして、もちろん、最後には彼の正体が露見し、偽善者の皮を剥がれ、いたたまれなくなつて大陸に逃れ、ウィーンで客死する。

本場ドイツの正統的なビルドゥングスロマンは、主人公がさまざまな試練（異性への愛もそのひとつ）を体験した後、最後に精神教育を成就させることができ、（例えば芸術家としての方向づけが固まつたりして）ハッピー・エンドとなることが多い。こうした先例を見て、イギリスの小説家でウイリアム・ゴドウィン思想の信奉者であるエドワード・ブルワーリットンは、小説『アーネスト・マルトラヴァーズ』（一八三七年）の一八四〇年版序文の中で、次のようなことを言っていた。

精神の教育ないし修業という新しいアイデア、それをわたしは僭越ながら哲学的意匠と呼ばせて頂くが、それについてわたしは、もともとゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』に負っていることが容易にわかるようにしておいた。ただし『ヴィルヘルム・マイスター』においては、どちらかというと芸術の修業であったが、わたしが取り上げたより日常的なプランでは、むしろ実人生の修業なのである。

リットンはこの小説の献辞の中で、「思想家、批評家の民族、偉大なるドイツ国民」とベタほめをしているが、その国民の創造した文学パターンを手軽に拝借して、紳士に立身出世する極めて実利的な物語を仕立て上げ、イギリス読者から喜び迎えられることに成功した。デイケンズはおそらくそうした流行を利用して、ビルドゥングスロマン（という言葉はもちろん使っていないが）に色目を使った立身出世物語を、例えば『デイヴィッド・コパフィールド』（一八四九〜五〇年）などで試みていた。

ギツシングはこうした偽物の横行に腹を立てて、本物のビルドゥングスロマンのイギリス版を示そうとしたのである。だから、自分自身の教育オブセッションを露骨に表面に出して、教育を無理して身につけても、立身出世とは逆に、自分の本来の居どころを失つて、故郷喪失、精神的亡命に終わることを強調し続けた。芸術家としての生き方と市民としての生き方の間に、決定的な断絶があることを示して、結果的には二十世紀小説のいくつかの先駆ともなった。

ただし、ギツシングの作品の中にも、主人公の精神成長に積極的・肯定的結実を与えている例が、数は少ないがある。『因襲にとらわれない人びと』（一八九〇年）の主人公の一人、ミリアム・バスタグがその顕著な一例である。産業革命の中心であるランカシャー州の資本家であった夫を早く亡くした若い未亡人だが、厳しい福音派教会の教育を受けたために、快楽や美を罪悪としか考えない。そうした彼女がイタリアへ行って、そこの

風土や生活によって、それから、そこで出会ったイギリス人の画家ロス・マラードの感化もあつて、精神に大きな変化・成長の花を咲かせることに成功し、最後にマラードと結婚する。

イギリス中産階級の頑迷偏狭な道徳に呪縛されていた女主人公が、イタリヤで開眼するという点で、確かにこの作品は後のE・M・フォースターの初期の小説『天使も踏むを恐れるところ』(一九〇五年)、『眺めのよい部屋』(一九〇八年)などを先取りしているところがある。しかし、フォースターがイタリヤという土地の靈——彼の好む言葉によると“genius loci”——神秘的な感化力、無知粗野な現地人の存在がイギリス人の精神解放に貢献している点を強調するのに対して、ギッシングはこの作品の中でそうした要素はほとんど無視して、教師としてのマラードの言動の方に重きを置いているところに注目すべきだろう。ここでも教育のオブセッションが、この小説をいささか図式化されすぎたビルドゥングスromanにしてしまっている。

第二部第七章は、ローマのヴァティカン宮殿でロスとミリアムが出会い、美術や古典文学についての講義をする男に対して、女がこれまで感じたことのない尊敬を、そしていつか恋心を抱き始めるといふ、重要な章であるが、その題が「学習と教育」となっているのに、読者は鼻白んでしまうだろう。作者の本音があまりにも正直に露出しすぎているからだ。恋人、あるいは妻を教育して、先生と生徒の関係を保ち続けるのが愛情の証し、末永い幸せの保証という、実生活では彼が実現できなかった夢

を叶えようとするお伽噺を、いかに楽観的な読者でも素直に信じることはできない。

第四節 教育が大衆化した時

イギリス公教育の歴史の上で画期的な出来事が、一八七〇年の初等教育法可決であることは周知の事実だが、もちろん即座に全国で無料公立小学校が学齡児童に門戸を開いたわけではない。それは数年後のこと、そして六年間の教育を受けた最初の小学校卒業生が実社会に出て行ったのはもつと先のことである。でも、一八七一年に読み書きできない国民の比率が、男では一〇パーセント、女では二〇パーセントであったのに、一八八〇年代以降は限りなくゼロに近づいて行つたのは事実である。

公立小学校校出の新しい世代に対して、当然出版関係者も作家も注目し、対策を考えねばならなかった。ギッシングの作品にもそれが反映されている。一八九一年に世に出た小説『三文文士』の第三十三章で貧しい売れない文士の一人ウエルプデイルが、このような無尽蔵の潜在読者に、いわゆる“half-educated” (生半可の教育を受けた) 以下の“quarter-educated” という新語を贈呈して、彼らを対象とした新しい週刊誌『雑談』を作れば、売れること間違いなしのだが、誰か資金を出してくれないかなあと、彼が自画自賛する「天才的アイデア」を披露する。

「やっとこ読むだけができるが、注意力集中はできない」連



図④「庶民のための安い文学教育」『パンチ』（1849年9月22日号）

庶民に読み書きを教えても、彼らが読むのは低俗新聞・雑誌のセンセーショナルな殺人や暴力記事ばかりではあるまいか。『聖書』は床の上に捨てられている。

中のために、「うんと軽くて内容のない……物語のかけら、解説のかけら、スキャンダルのかけら、冗談のかけら、統計のかけら、馬鹿話のかけら」を満載した、まさに軽薄短小の大衆雑誌（図④）である。例えば「女王は何を食べている」とか「グッドストーン首相のカラーは如何にして作られるか」といった短い記事でお客を釣る。

一八九一年に『三文文士』を読んだ人なら、すぐにこれには現実の先例、モデルがあつたと気づいただろう。ジョージ・ユーンズが一八八一年にマンチェスターで創刊した『ティット・ビッツ』（*The Bits*）に対するあてこすりである。創刊号は発売開始から二時間のうちに五千部を売ったという。この人気の秘密は、主に一般読者からの投稿文を掲載したという新しい

アイデアにあった。体験談、耳にした噂話、読んだことのある印刷物からの内容要約、ともかく何でもいいから投稿してくれと呼びかけたなら、一日に二百通以上の応募があつた。もちろん素人のものだから、文章も下手、内容も貧弱だが、そこが多読者の引きつけ、さらに多くの投稿を招くこととなつたのである。

そのうちに常連投稿者ができた。その中から後の作家アーノルド・ベネットやコナン・ドイルが誕生した。雑誌懸賞文で一等になつたシрил・ピアソンは、編集部員にスカウトされてプロとなり、後に独立して『ピアソンズ・ウィークリー』を創刊した。常連投稿者の一人アルフレッド・ハームズワスは、後に新聞王ノースクリップ子爵として天下に名を轟かすこととなる。彼は自分を育ててくれた恩人ニューンズについて、後にこう語つた。

公立小学校がものを読みたがつている男女を毎年何十万と送り出している。彼らは普通の新聞など目もくれない。この「ティット・ビッツ」を生み出した男は、自分で思っている以上の大した大ものを入れたわけだ。彼こそジャーナリズムを全面的に変えることとなる進化のまきに出発点に立っているのだ。

ニューンズ自身一八八四年ロンドンに本社を移し、一八九一年に『ストランド・マガジン』を創刊した。彼に育てられた下

イルのホームズ短篇連載のお陰で、この雑誌が不朽の名を後世に残すこととなる。

ここで話はギッシングに戻るが、彼はただ単に教育の大衆化を上から見て冷笑を浴びせているだけの知的スノープではなかった。『三文文士』の中では、未来に生き残れるのはウエルブデイルや批評家ミルヴェインのような現実感覚の持ち主だけで、「武士は喰わねど高楊枝^{たかやうじ}」の古臭い文士は退場せざるを得ないのだと、はっきり示されている。ギッシング自身が、この頃から短篇小説を雑誌に掲載することに熱意を燃やしはじめている。長くて重い三巻本小説の時代はもはや去つたと悟つたのである。自分があのように執着した教育の現実社会における大衆化現象が文学の形まで変える力を持ったのだと。

* * * * *

イギリスの諷刺マンガ週刊誌「パンチ」は、毎年の初めに「今年のカレンダー」という特集を掲載していたが、一八八四年のカレンダーに、ハリー・ファーンズ描く「教育フランケンシュタイン——未来の夢（初等学校委員会に献げる）」というカリチュアが出ている。本章の冒頭にそのコピーを示したが、細部まで読み取るとは難しからうから、以下補足説明を試みよう。

「フランケンシュタイン」とは、いまでは説明の必要のないくらい誰でも知っている言葉となっている。本来はメアリ・シ

エリーが一八一八年に発表した小説の表題で、その主人公であるスイス在住の若い科学者の名前である。彼は科学に純粹の熱意を抱き、科学の発達は人類の未来に無限の幸福をもたらすと信じて、人間と同じ感情を持つ人造人間を創造することに成功した。

だが、作られたロボットは、なまじ人間と同じ微妙な感情を持つことが裏目に出て、己れの醜悪奇怪な外観に周囲の人びとが恐怖と敵意をむき出しにすることに最初は傷ついて悲しむが、遂には自分の創造主のみならず全人類に対して憎しみを持ち、復讐のために殺害絶滅しようと決心する。

この小説があまりにも広く人気を呼びすぎたため、いつしかフランケンシュタインとは、恐ろしい怪物の名前と一般に受け取られるようになり、今日に及んでいる。このマンガも明らかにそうした認識に基いていることがわかる。

一八七〇年の法によって初等教育だけは国民が全員無料で受けられるようになり、そうした教育を受けた多数の人びとが社会に出て来るようになったのが、一八八〇年代の中頃だった。既に見たように、これは半世紀以上も前から、善意の人たちの努力の積み重ねが実を結んだものだったが、結果は手放しで満足していられるものばかりではなく、予想もなかった弊害が現れたことを、このマンガが示している。

画面の下の方には、この新制度のお陰で失職し、「飢え死にしかかっている」と悲鳴をあげている人たちがいる。例えば、

個人(家庭)教師——その多くは女性。文学の大衆化によって生活に窮する芸術家——『三文文士』の主人公リアドンやビツフエンのような人たち。その他もろもろ。

だが、重要な訴えは、こうした個々のケースではない。画面の中心で必死に身もだえしているのは、「教育」それ自身である。おそらくいまや強力すぎなくらいになった怪物の前では、ひとたまりもなく敗れたり、亡び去るしかないだろう。

ベンサムなどのラディカルたちが推進し、その著書の表題で歌い上げた「役に立つ学問」は、もちろん善意から生み出したものだが、結果としてはデイケンズが示した悪夢、マクチャョーカムチャイルド先生のような怪物を大量生産してしまった。つまり、教育フランケンシュタインである。

このマンガの主人公である怪物が腰にぶら下げている袋には、「ポンド、シリング、ペニー」と書かれている。マンガ家の意図としては、公教育には金がひどくかかる、つまり一般大衆の税金の負担がきつくなる、と言いたいのかもかもしれない。しかし、その後現在に至る世界の情勢を知っているわたしたちから見ると、これは教育が産業のひとつとして確立して、金儲けと効率のみを追求するようになった未来の悪夢を、早くも予言しているように思えてならない。

純粹の善意が恐るべき害悪を生み出し、それが逆に創造主に復讐して抹殺してしまうという、フランケンシュタイン図式は、まさに教育においてもっとも露骨に具現化されるものである。

とを、このマンガは残酷にも見せつけてくれる。つまり、それはタテ前と本音の喰い違いを適当に誤魔化し、見て見ぬふりをして来たツケである、と言い換えてもよからう。

ギッシングがこのマンガを実際に見たことあるかどうかはわからない。それを示す具体的証拠は、私の知る限りではないようだ。でも、『パンチ』は多くのインテリによっても愛読されていたし、ある人に言わせれば『タイムズ』紙と並んだイギリスの名物なのだそうだから、おそらく見ていたのではないかと思う。果して、どんな感想を持っただろうか。画面の中のどの部分に共感、あるいは反感を抱いただろうか。想像してみることも無駄ではあるまい。

註

(1) 関心のある方は次の論文を参照。Shigeru Koike, "The Education of George Gissing" in *English Criticism in Japan*, ed. Earl Miner (U of Tokyo P. 1972) 233-58.

(2) カギカッコをつけたのには理由がある。つまり、「社会に強く関心を持った小説」というような漠然とした意味ではなく、ルイ・カザミアンがその著『イギリスの社会小説』(一九〇三年)で定義した、限られた範囲の小説を指している。イギリス産業革命の影響で生じた階級間、あるいは労使間の対立抗争を主なテーマとする小説のことで、時代でいうと一八三〇年代から五〇年代にかけて発表された作品。

(3) "Mr. Chokumchild" という字からどのような連想を読者に持た

せるか、そこがディケンズのユーモリストとしての腕の見せどころだろう。*‘Mick’* から当然スコットランド出身だとわかる。当時小学校教員にスコットランド出身者が多かったと指摘する人がいるが、スコットランド人の実字尊重の姿勢を意味すると考えてもよいかもしれない。ヘンリー・ブルームもサミュエル・スマイルズも同地の出身だった。さらに *‘stroke’* と *‘child’* から「子供に知識を詰め込んで窒息させる」と連想するのは当然。*‘outkun’* は、かつて木造船に水が浸み込まぬよう板の間に詰め込んだポロ布で、これを作る単純・退屈な作業は監獄で囚人に課されたもの。つまり、学校を監獄化するのがこの先生の仕事だった。

(4) なお本節の記述に関しては小池滋『英国流立身出世と教育』(岩波新書、一九九二年)をも参照。

(5) 代表作にゲーテの『ヴェルヘルム・マイスターの修業時代』(一七九六年)、『ヴェルヘルム・マイスターの遍歴時代』(一八二九年)など、ドイツの小説が多いため、いまだにドイツ語のまま各国でも用いられている。日本では「教養小説」と訳されている場合があるが、次の理由から、ここでは使わないことにしたい。ドイツ語 *‘Bildung’* は精神形成のプロセスと、その結果得られたものの両方の意味を持つ。「教養」はその後者に對してつけられた訳語だが、この種の小説の主要テーマは前者の持つ動的プロセスであるから、静的ニュアンスを持つ「教養」は訳語としては誤解を招きやすい。なお、詳しくは『教養小説の展望と諸相』(しんせい会編、三修社、一九七七年)、とくにその中の一章、柏原兵三「ドイツ教養小説の系譜」の序章(五九〜六五頁)を参照。イギリスの場合については、川本静子『イギリス教養小説の系譜』

「紳士」から「芸術家」へ(研究社、一九七三年)、および小池滋「イギリス・ビルドダウン・グスロマン序説」(『教養小説の展望と諸相』一七〜三四頁)を参照。

(6) Cf. Jacob Korg, “Division of Purpose in George Gissing,” *PMLA*, LXX (June, 1955) 323-36.

(7) 詳しくは小池滋『島国の世紀』(文藝春秋、一九八七年)第二章第四節「普通教育制度とマスジャーナリズム」(一一六〜三一頁)を参照。

(8) Q. D. Leavis, *Fiction and the Reading Public* (1932. London: Chatto & Windus, 1965) 311, note 96.

(9) Q. D. Leavis は「最初の近代的雑誌」(Leavis 179)と評した。